

進捗状況の概要 ※得られたアウトカムを含む構想の実現の観点から記載すること【1ページ】

本学は、先端科学技術分野で世界を先導する研究の推進と、世界の将来を担うグローバルリーダーの育成において、確かな存在感を示し、世界から高く評価される大学を目指しており、構想調書に沿って以下の取組を進め、令和元年度の間目標値を概ね上回る成果を達成した。

1. 戦略的な大学組織改革と大学院教育改革

(1) 1 研究科体制への移行

科学技術の進展と新たな社会的要請に柔軟かつ機動的に対応するため、教育研究体制の改革にスピード感を持って取り組み、当初の予定より1年前倒して平成30年度に、従来の3研究科（情報科学研究科、バイオサイエンス研究科、物質創成科学研究科）を1研究科（先端科学技術研究科）に統合した。

(2) 融合領域教育の強化

1研究科体制では、諸問題の解決に貢献する人材の育成目標に沿って、多様な教員をダイナミックに組織し、学際・融合的な教育を推進する教育プログラムにおいて、これまでの情報科学、バイオサイエンス、物質創成科学の基幹領域に基づく3つの教育プログラムに加えて、それぞれの2つの領域を融合する3つの融合教育プログラムと3つの領域全てを融合するデータサイエンスプログラムの計7つの教育プログラムを設置した。

(3) 国際通用性のある大学院教育

国際通用性のある大学院教育を推進するため、博士前期と後期両課程の全教育プログラムにおいて、英語による授業及び研究指導での学位取得を可能とし、日本人学生と留学生がともに学ぶ学修環境を構築した。さらにグループワークとアクティブラーニングを主体としたPBL科目の設置、GPAによる成績評価システム、ルーブリックによる学位論文進捗状況評価システム等、国際的に通用するカリキュラムと評価システムを導入した。また、国際共同研究や国際協働での遂行能力を重視した体系的な人材育成のためのダブルディグリー・プログラムの強化・実質化を図った（平成22年度1機関から令和元年度末7機関に拡充。受入・派遣実績16名）。

(4) 留学生の多様なキャリア形成

平成30年度に教育推進機構にキャリア支援部門を設置し、日本人学生、留学生、博士研究員それぞれに対するキャリア支援を充実させた。特に、留学生のキャリア支援体制を整備し、英語によるキャリア相談や日本特有の就職活動事情等をテーマとした就職ガイダンスを開始するとともに、日本企業が求める日本語能力を習得させるため、レベルに合わせた「日本語I-V」を正規科目として開講した。

2. グローバル化の推進

(1) グローバルキャンパスの実現

インドネシアとタイに設置した「海外オフィス」を拠点とし、外国人修了生ネットワークを活用してシンポジウムを開催するだけでなく、協定校を個別に訪問して広報活動を展開することにより、本学の知名度向上に努めた。JASSO日本留学フェアへの参加、協定校訪問及び海外オフィスを拠点とした学生募集活動や学部学生を非正規生として受け入れる特別学修生制度により、留学生が大幅に増加した。また、平成28年度に留学生・外国人研究者支援センター（CISS）を設置し、留学生・外国人研究者とその家族の生活相談や多様なニーズに対応できるワンストップ・サービスを実現した。

(2) 事務職員の高度化

海外SD研修の実施や職員の国際対応力の向上を目指したSD研修会の開催を通して職員のグローバル化を図り、外国語力基準（TOEIC 750点以上）を満たす専任職員を事務局の全ての課・室に配置することによって、事務職員の高度化に関する当初の目標を着実に達成した。

3. ガバナンス改革

先端科学技術分野に特化した小規模大学であるという機動性を生かし、学長のリーダーシップを発揮できる管理運営体制を構築している。具体的には、学長を本部長とする「戦略企画本部」において策定する大学の将来構想や教育研究の基本方針の下、「先端科学技術研究科」を中心に教育研究を行い、「教育推進機構」「研究推進機構」が両輪となって教育研究の活性化を推進し、「事務局」等の事務組織がこれらの活動を支える体制となっており、全学的視点からのマネジメントを可能としている。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

●世界トップ水準の研究力に基づく大学院教育モデルの構築

科学技術の進展と新たな社会的要請に対応する教育研究体制を構築するため、当初の予定より1年前倒しして平成30年度に従来の3研究科体制（情報科学研究科、バイオサイエンス研究科、物質創成科学研究科）を1研究科1専攻体制（先端科学技術研究科）に改組した。これにより今までの研究科間の垣根をなくし、関連する研究分野の教員が結集して最先端科学技術の柔軟な教育体制を構築した。ここでは、最先端科学技術の基盤となる領域である「情報理工学」「バイオサイエンス」「物質理工学」の3つの教育プログラムと、新たに融合領域分野である「情報生命科学」「バイオナノ理工学」「知能社会創成科学」「データサイエンス」の4つの教育プログラムを編成した。また、博士前期・後期課程の標準修業年限（5年）内で一貫した博士研究指導を行う「5年一貫コース」を設置し、専門領域に関する深い学識、豊かな創造力及び国際的視野を有する人材を長期的に育成することが可能になった。令和2年3月に1研究科での初の博士前期課程修了者321名を輩出した。主な就職先は国際的に事業を展開している多様な企業であり、社会課題解決を推進するリーダーとしての活躍が期待される。融合教育プログラム履修学生の就職動向で特筆すべきこととして、バイオサイエンス分野の研究を志望して「データサイエンス」プログラムを履修した修了者が情報・通信業の情報処理・通信技術者として就職、また「バイオナノ理工学」プログラムの修了者が繊維工業や医薬品製造業の製造技術者として就職するなど、従来の専攻分野における就職先に捉われない事例が見受けられた。

●海外オフィスを拠点とした外国人修了生（同窓生）ネットワークの活用と優秀な留学生の獲得

インドネシアとタイに設置した「海外オフィス」を拠点とし、さらに外国人修了生ネットワークを活用してシンポジウム開催、学生募集活動、数多くの協定校訪問等を実施している。ボゴール農科大学に設置されたインドネシアオフィスは、非営利法人として認定されている本学インドネシア同窓会（INAA）との継続的な連携協力により運営されており、オフィスを介した本学への留学相談の対応、相互訪問の打診・調整やボゴール農科大学主催の就職・留学フェアへのブース出展等、インドネシアにおける本学の窓口として活発に活動している。カセサート大学に設置したタイオフィスにおいても、オフィスを拠点として学生シンポジウムの毎年度開催やインターンシップ生のリクルート活動を積極的に展開しており、その結果、優秀な正規留学生の獲得につながっている。

●留学生・外国人研究者支援体制の拡充とグローバルキャンパス実現

留学生・外国人研究者とその家族の支援強化のため、ワンストップ・サービスの窓口として留学生・外国人研究者支援センター（CISS）を設置し、多様なニーズに対応できる支援体制を構築した。学内サービスのほか、留学生のピアサポート体制強化のための留学生アンバサダー制度の実施に加え、地域との連携により留学生・外国人研究者が行政・医療サービスを利用する際の利便性を向上させた。グローバルキャンパスの実現に向けた留学生・外国人研究者の積極的な受入れと上記支援体制の拡充により、全学生に占める留学生の割合は、令和元年5月の実績値（24.9%）が令和5年5月の最終目標値（23.2%）を上回った。留学生・外国人研究者の生活環境整備の取組は、文部科学省による平成29年度に係る業務の実績に関する評価結果において「注目される取組」との評価を受けた。

●留学生の多様なキャリア形成に向けた支援

平成30年度に教育推進機構にキャリア支援部門を設置し、日本人学生、留学生だけでなく、博士研究員等の若手研究者も含めたキャリア支援を充実させた。特に留学生のニーズに特化したキャリア支援を行うための体制を整備し、英語によるキャリア相談や日本特有の就職活動事情等をテーマとした就職ガイダンス、留学生の持つポテンシャルに高い関心のある企業と留学生との交流を促進するイベント、修了留学生とのキャリア交流イベントを開催した。また、日本企業が求める日本語能力を習得させるために平成29年度に日本語能力試験対策講座を開講し、さらに平成31年4月から日本語能力試験N1～5のレベルに対応した「日本語I-V」に整理統合することで、正規カリキュラム内で幅広い日本語教育を実施できる体制とした。

●エデュケーション・アドミニストレーター（UEA）及び外国人英語教員の配置

教育に関する戦略・計画を迅速に実現するための教育支援組織として教育推進機構を設置し、カリキュラムの策定・改善、キャリア支援、国際展開支援業務等を行う高度専門職系職員であるUEAを配置することにより、教員が教育研究に専念できる体制を構築した。平成29年度にUEAの人事制度を新たに策定し、能力や経験等に応じた職階を設け、審査の結果によっては無期雇用への転換を可能とするキャリアパスを確立した。また、学生の英語力強化のために、外国人英語教員3名を平成30年度に「教育推進機構」に配置換えし、令和2年度より2名を常勤教員とした。